

「グレート・ギャツビー」という小説をご存じだろうか。アメリカの「狂騒の20年代」の作家F・スコット・フィッツジェラルドの代表作である。近年では2013年にレオナルド・ディカプリオ主演で映画化された。

この映画公開の前年、当時の大統領経済諮問委員会委員長だったアラン・クルーガーは、アメリカの不平等の状況についてのスピーチを行い、その中で所得格差と世代間流動性の関係に

世代間流動性と機会の平等

をプロットすると、正の関係がみられるというものである。

ジニ係数とは所得格差の程度を表す数字であり、大きいほど不平等であることを意味する。世代間所得弾力性とは親の所得が平均より1%高くなった場合に子の所得が平均より何%高くなるかを表す数字であり、大きいほど世代間流動性が低いことを意味する。両者に正の関係があるということとは、所得格差の大きな国ほど世代間の所得流動性が低い傾向があるということだ。

クルーガーは、この曲線をもとにアメリカの将来の世代間流動性はさらに低くなるだろうと予測し「機会

ゴリー・クラークは、この有名なタイトルの「Sun (日)」を「Son(息子)」に入れ替え、「The Sun on Aiso Rise」という本を2014年に出版した(邦訳は「格差の世界経済史」)。

この著作ではさまざまな国の流動性が長期的な視点で分析されている。総合的な社会的流動性を計測するため、「姓」を用いた方法がとられているのが特徴である。

日本を対象とした分析では、明治期の士族や華族の珍しい姓が現在も研究者や弁護士など社会的地位の高い職業の名前に高頻度で表れることを示し、日本の社会的流動性が従来考えられていたよりも低いことを指摘している。こうした傾向は他の多くの国々においてもあてはまるのだという。

社会的地位の高い家系にあつては「子もまた昇る」のが社会の法則というわけだ。

どのような家庭の子供でも生まれ持った才能を開花させるためのチャンスが与えられることは望ましい。公平性のためにはもちろん、社会全体としてもその成果の分け前に預かることができるからである。

では、機会の平等を確保するにはどうすればよいだろうか。世代間流動性の決定要因は、教育、税制、遺産、婚姻など多岐にわたる。機会の平等のみで十分なのかを含めて、効果的な処方箋の検討が必要であろう。

全ての子供に公平な

チャンス提供を

「グレート・ギャツビー曲線」と名づけた。これは、横軸にジニ係数、縦軸に世代間所得弾力性をとった平面にOECD諸国のデータ



名古屋市立大学大学院
経済学研究科准教授
木村 匡子

きむら まさこ マクロ経済学。京都大学博士(経済学)。1979年生まれ。

の平等」が危機にあることを指摘した。小説に登場するジェイ・ギャツビーは貧しい農夫の息子でありながらニューヨーク郊外に大豪邸を構えるようになった人だが、彼が体現するアメリカン・ドリームもおとぎ話というわけである。

さて、「The Sun Aiso Rises (日はまた昇る)」といえば、フィッツジェラルドの友人でもあったアーネスト・ヘミングウェイの長編小説である。経済史家のグレ

